

蕪崎の 白きペンキの驛標に

薄日のしみて 光るさみしさ



蕪崎駅開業115年と中央本線

今から115年前の明治36年12月15日に、蕪崎で起きた大きな出来事という何を思い浮かべますか。

実は、中央本線の蕪崎駅が開業した日なのです。蕪崎に鉄道が走るまでには紆余曲折がありました。本格的な鉄道計画は明治20年の甲信鉄道株式会社が開業した御殿場と松本を結ぶ路線ですが、実現には至りませんでした。ちなみに、会社の創設者の一人、小野金六さんの生家の蔵座敷は蕪崎市民俗資料館の北側に移築されています。

その後、国によって計画され、現在の中央本線が建設されることになりました。

計画された中央本線のルートはもとと案ありました。一つは、現在のルートで七里岩台地を走るもの、もう一つは釜無川右岸を走るものです。釜無川右岸のルートは、



七里岩の急崖の急こう配を避けることのできる利点がありました。大武川や小武川などの河川を越さなければならず、水害に弱い200m級の橋2本と90m級の橋5本が必要となることや、蔦木から北が急こう配になることから、七里岩台地を走るルートが選ばれました。こうして、中央本線が作られるのですが、その頃の様子を伝える鉄道遺産を今も見ることが出来ます。

例えば、塩川鉄橋の土台の根本を見ると、コンクリート基礎の下に加工した石を積み

上げた土台を見ることが出来ます。穴山駅付近の上り方面のトンネルはすすけたレンガ積みを見ることができて、煙を吐き出す蒸気機関車が走っていたことを伝え、レンガの積み方はイギリス積みという手法であることも分かります。そのようなところにレトロ感があつて魅力となっています。

中央本線の開通によって、大勢の方々が蕪崎を訪れるようになります。そのことを伝えるものが蕪崎駅にあります。『蕪崎の 白きペンキの驛標に 薄日のしみて 光るさみしさ』と刻まれた石碑です。詩人として有名な北原白秋が、明治42年11月30日に蕪崎駅に降り立った時に詠んだもので、碑は昭和44年11月1日に白鳳会の方々が建立したものです。明治45年3月28日午前10時8分には大正天皇になる前の皇太子様、昭和22年10月14日午後2時には昭和天皇が山梨御巡幸で蕪崎駅を利用しています。

蕪崎駅開業のこの12月、中央本線の魅力を振り返りつつ、のんびりと市内に残る鉄道遺産を探す小旅行にでかけてみてはいかがでしょうか。
(文化財担当 関岡 俊明)

シリーズ 移住者インタビュー Vol.3

「野菜作りから生まれる「縁」を繋いで」

穴山町 犬飼 啓郎さん

静岡県で会社勤めをしていた犬飼啓郎さんは、脱サラ後、北杜市での農業研修を経て、3年前に穴山町へ移住し、無農薬・化学肥料不使用の「安心・安全」にこだわった果菜・葉物・根菜の多岐にわたる野菜栽培に励んでいます。

農業を始めるきっかけは、静岡県で経験した月に1度の農業体験でした。自分で栽培した野菜をたくさんの人に食べていただきたいという想い。自分が栽培した野菜を食べたいなと言っていただけ。そんな農家にあこがれて脱サラし研修し就農の道を選び始めました。

現在は、約1畝の農地を借りて、年間約130種類の野菜を栽培し、宅配販売を中心に全国へ旬の野菜をお届けしています。犬飼さんが蕪崎市へ移住を決めたのは、移居前から懇意にしていた先輩移住者からの勧めがきっかけでした。先輩移住者が経営するお店に野菜を卸していたこともあり、穴山町は移住者と地域住民とのつながりがよく、非常に住みやすい地域である



ることを知りました。実際に、犬飼さんが家や畑を探した時にも先輩移住者や地域の方々から温かい支援をいただきました。また、犬飼さんは地域の方々と繋がり大切にしたいと自治会や消防団の活動にも参加しています。地域に馴染むのも、野菜を買っていただくのも信頼していただくことが大事。という犬飼さん。自らの野菜作りから生まれる「縁」を繋いで、地域やお客様との関係を築いていきたい。そんな想いから付けた屋号は「犬飼農en」。新たな「en」を生むために、今後は、自らが影響を受けた農業体験や畑でのイベントなども開催してみたいですね。と笑顔で答えてくれました。

